

平凡な日常のかたわらに



岡部中学校3年 吉田 よしだ にいな

「死ぬ。」 その言葉がブログに書き込まれて いるのを見た女子高校生が、それが 元で自殺したというニュースを、今 朝聞いた。

わたしは、ぞっとした。「死ぬ」「ウ ザイ」「キモイ」などの言葉は、わ たしが友達との日常会話の中で、も は や当たり前となるほど使っている言 葉だったからだ。

勿論、本気で友達に死んで欲しい と思っただけでそんな言葉を口にしている わけではない。何かちよっとした冗 談を言われた時に、いわば条件反射 のような感覚で使う「返し言葉」な のだ。そして、それを言われた友達 も笑っていたし、言ったわたしただっ て笑っていた。繰り返し返される日々 の中、人の痛みを理解する感覚が麻痺 していた。

しかし、今朝見た悲しいニュース で、わたしは後悔した。友達に安易 に酷い言葉を投げかけた事を。自分 自身、嫌な事を言われたら悩むし、 苦しむ。そんな言葉を、わたしは毎日、 大切に失い難い友達に向かって言っ ていた。あの時、友達に笑っていた。 しかし、心の中でその言葉は、どう 響いていたのだろう。泣いてはいな かったか。嫌ではなかったか。苦し

んではいなかったか。もしかすると あの時見せた笑顔は、仮初めのもの だったのかもしれない。

わたしだって、そんな言葉を何十、 何百と聞いてきたし、言われてきた。 その時、わたしは友達と同じように 笑っていた。しかし、自分でも気付 かないような心の奥底は、どうであっ ただろうか。酷い言葉を、言ったり 言われたりする事で、雨よりも冷 たく、芯まで染み入るような水の粒 が、心を埋めていったに違いない。 一粒、そしてまた一粒。それはまる で、いずれ溢れるグラスの中にたまっ ていく水のような。

今、暗いニュースばかりがこの世の 中に蔓延っている。人を騙し、人を殺し、 自ら命を断つたというニュースを聞い ても、人は何も感じなくなっている。 いや、感じないふりをしている。自分 には関係ないと、逃げるように。自分 だが、それはわたし達の近くでも起 こり得る事なのだ。平凡な日常のかた わらに、悲しい事故、事件につながる ような出来事が沢山ある。その出来事 に、多くの人は気付いていない。気付 いたとしても、あまり重くは受け止め ていないだろう。しかし、その出来事 に悲しい事故や事件が起こってから気 付き、受け止めても、もう遅い。 普段、わたし達が何気無く使ってい る言葉で、毎日多くの人が、互いを傷 付け合っている。この世の中から、暗 いニュースが流れないようにするには、 一人一人がこの事に気付く、人を 傷付ける言葉を人を喜ばせる言葉に変 えていくことが必要なのだ。 早く気付いて欲しい。グラスから 水が溢れる前に。

# 夢

## なかるべからず

桜木 さくら さん  
雪弥 ゆきや さん

## 笑顔と親しみの表現者



## 感動を投影する

「当たりの良い仕事場には、所狭しと資料が並ぶ。」

その一角、ぬいぐるみと愛犬の 写真に囲まれ、しなやかにペンを 走らせる女性がいる。

桜木雪弥 発行部数90万部をほ

この週刊ヤングジャンプに「いぬ ばか」を連載中の人気漫画家であ る。彼女の描く世界は、日常の感 動を投影し、その絵は、やわらか く親しみ深い。取材当日、少し恥 ずかしそうにベレー帽姿で現れた 彼女自身もまた、その笑顔に親し みを帯びていた。

# 譲葉の賦

## 譲葉の如く

文久三年（一八六三）十一月十二日、 この日に決起を企てる集団がもう一つ この北武蔵の地にあった。尾高藍香、 長七郎兄弟や澁澤栄一ら六十九名によ る慷慨組がそれである。この慷慨組は 可堂ら天朝組の義挙と時を同じく決起 し、高崎城を乗っ取り横浜を焼討ちし ようと謀議を巡らせていたのである。 義挙決行も目前に迫った十月下旬、 この謀を知った可堂は、人目を避ける ように藍香、長七郎兄弟を訪ねた。

「我ら天朝組は、この国を正しきかた ちに導くためであれば死をも厭わぬ。 言わば死兵じゃ。それ故、戦地では強 いが治世は出来ぬ、この国の正しきか たちを創り出すのは、若いお主らよ。 十津川の天誅組の話は知っておろう、 我らも彼らと同様に散るやもしれん。 その時はお主らに継いでもらいたいの だ。」そう頭を下げる可堂の姿に藍香 らは、咽び泣きただ頭を垂れた。 義挙決行の日、昨夜来降り続いた雪 は、あたり一面を銀世界に変えていた。 この大雪は、越後の同志三百名の峠越 えを許さず、可堂は義挙決行を延期せ ざるを得なかった。 さらに、天朝組を不幸が襲う。

## 桃井可堂伝

同志の一人である湯本多門之助が義 挙の失敗を憂い江戸南町奉行所に自首 したのである。このため天朝組の計画 は一挙に露見し、幕府の知る処となっ た。この報に接した可堂は、まず盟主 である岩松俊純に義挙を誹謗する内容 の訴状を持たせ直訴させた。そして、 この義挙のために参集した同志達を散 らせるための手配りを済ませ、文久三 年十二月十五日夜、幕府に自首すべく 家を出た。可堂は、天朝組義挙に対す る全責任を一身に負い、一人の連累者 も出さずに事を収めたのである。

「先生…、勝先生どうしました。」 「龍さんかい。いやね俺が親しくし ていた尊皇派の先生が亡くなったって 知らせだ。何でも最後は幕府の飯を食 うのは嫌だって言って、牢の中で何に も食わずに自ら命を絶ったそうさ。」 「そうですか。」 「この先生はちよっとばかり早過ぎ たんだよ。まあ、動かすべき藩があれ ば話は違ったかもしれないがね。なあに 私ら幕臣もすぐに後を追うことになる よ。確かに今の幕府はいけねえや。」 元治元年（一八六四）夏、若葉を煙 かせて風に揺らぐ譲葉の木は、神戸の 海を望む二人をそっと見守っていた。

## いつも絵とともに

「親がよく絵本を読み聞かせ てくれたんです。」

幼い頃から絵本や漫画が大好き だった。広告の裏面を使っっては、い つも絵を描いていた。小学校の休み 時間もペンを放さない彼女には、し だいにファンができていった。同級 生のノートや下敷きに、桜木のキャ ラクターが踊った。

上柴中学校にあがると、当時の人 気漫画に影響を受け、新体操部に入 部。振り付けを自ら創作し、表現者 としての片鱗を見せた。部活でへと へとになっても、書店に立ち寄るの が下校時のお決まりコース。お小遣 いはすべて漫画に消えていった。



「深谷に帰るとほっとします」 故郷を愛する彼女の作品の中には、深谷を感じさせる表現がたび たび登場する

プロへの足掛かりとなったのは出 版社主催の漫画コンクール。卒業を 控えた高3の冬、人生の軸足を「絵」 に定めた桜木は、その決心を一編の

## むくむくみ

作品に映しこんだ。卒業後、デザイ ンの専門学校に進学したが、まもな く彼女の耳に受賞の朗報が伝えられ た。編集者からはプロデビューの話。 突然開かれた道に迷うことなく飛び 込んだ。

5 年に亘る長期連載も経験し、 現在では、人気漫画家として 世間に知られる存在となった。しか し、自身はあくまで、苦楽を共にす る『さくらぐみスタッフ』への感謝 の気持ちを口にする。

「私は、アシスタント経験も少な いし、一人で何でも出来るわけじゃ ないんです。スーパースタッフの皆 さんがいて作品ができるんです。」

「ゆきやん先生」とスタッフから 愛される人柄は、どことなくひよう きんに、今日もさくらぐみへ温かな 春風を運び込む。

## 夢七訓

- 夢なき者は理想なし
- 理想なき者は信念なし
- 信念なき者は計画なし
- 計画なき者は実行なし
- 実行なき者は成果なし
- 成果なき者は幸福なし
- ゆえに、幸福を求める者は 夢なかるべからず※

※本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています

天誅組の変…文久3年(1863)8月17日に吉村寅太郎をはじめとする尊皇攘夷派浪士の 一団(天誅組)が大和国で決起し、後に幕府軍の討伐を受けて壊滅した事件